
名探偵コナン～Life where it seems to disappear～

N・Izumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン〜Life where it seems to disappear〜

【Nコード】

N8115Q

【作者名】

N・Izumi

【あらすじ】

最近体調がおかしいと灰原の下にやってきたコナン。 検査を受けたコナンに、灰原は…？ コ哀・コ蘭前提※シリーズ

prologue (前書き)

初の連載でシリアス注意。文章力の無さは相変わらずですが、よろしく願います。

prologue

「病気…?」

「ええ…それも、厄介な病気」

小さな科学者は、そうはっきりと告げた。



1ヶ月前か曖昧だけど、身体の調子が悪いことには気付いていた。

まさか病気だとも思わなかったし、大した事じゃない。その内治るだろうと甘く見ていた。

だが違った。

そこか一番病気の恐ろしさ。

まんまと落とし穴に嵌ったのだ。

「あなたに、あれほど言ったわよね？体調が悪いなら言いなさい、と」

小さな科学者は、本気だった。

そして、どうしてあれだけ調子の悪いコナンの体調を見て、異変に気づけなかったのかを激しく後悔した。

彼女の顔がみるみる青ざめていくのが、コナンにもわかったらしく、動揺が隠せない。

「俺、死ぬのか…？」

弱々しい声で聞く。

その声に怯えが混ざってるのがはっきりとわかる。

「なあ、教えてくれ…！」

コナンの手が、ガッと彼女の肩を掴む。

小さな科学者は、顔を歪め、唇を噛んでいた。

覚悟したのか、瞳をギュッと閉じ、ゆっくりと口を開き、彼女は言った。

「助かる確率は、100%中…」

「100%中？」

「…35%以下よ」

「35%…?」

一瞬でコナンの視界が暗くなった。
肩はガタガタと震え、座ってる椅子から落ちそうになるが、灰原に支えられる。

「あなたの病状は、普通じゃないわ」

そう、コナンの病状は普通じゃなかった。

吐血や発熱、意識混乱など様々な症状が出てるのだ。

もはや手に負える状態じゃない。

「手遅れよ」

「手遅れ…死ぬのか…」

「ええ…死ぬ確率が高いわ」

「俺が死んだら…蘭は…蘭はどうするんだよ…!」

「…そんなの」

「組織も潰してねえのに」

「…工藤くん」

「俺はまだ死ねない！」

コナンは自身の左胸をギュッと掴む。

「俺は…！ゲホッ！ゴホッゴホッ！」

いきなり噎せるコナン。

両手で口を抑え、体を前に傾ける。

「ゴホッ！ゲホッゲホッ！うつ…くう…！」

咳から解放されたかと思って、手を離れた途端

「う…！」

コナンは口を抑え、椅子からずり落ちた。

灰原は慌てて、コナンを抱きかかえた。
抱えて気づいた

コナンが吐血したことに。



PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115q/>

名探偵コナン～Life where it seems to disappear～

2011年3月21日23時28分発行